

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520004

研究課題名（和文） 時と意味—生の意味に関する現象学的分析の試み

研究課題名（英文） Time and Meaning; A Phenomenological Analysis of the Meaning of Life

研究代表者

佐藤 透 (SATO TORU)

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：60222014

研究成果の概要（和文）：本研究は、「人生の意味」という問題に、ここで使われている「意味」概念の現象学的分析を通して迫った。この意味概念は「連関意味」と名付けられて言語的意味概念からは区別され、その本性が「未来への影響」ということを中心に探求された。また、人生が死という限界を超えて有意味となりうる条件や、それを満たす伝統的歴史観が考察され、さらにはそうした伝統的歴史観とニヒリズム（意味喪失）とのジレンマを、連関意味の基盤となっている時間概念の変更を通して回避する方が検討された。

研究成果の概要（英文）：This research approached the problem of 'the meaning of life' through the phenomenological analysis of the concept 'meaning'. We called this meaning, which should be distinguished from the linguistic one, 'relevance-meaning' and showed that its essence consists of influencing the future. We also examined the conditions that enable a life to be meaningful beyond the limit of death and traditional views of history that satisfy the conditions. In the end section of this research we confirmed that we could conquer the dilemma as to whether accept one of traditional views of history or a kind of nihilism by abandoning the linear image of time upon which the above-mentioned 'relevance-meaning' is based.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：哲学、現象学、時間、意味、人生

1. 研究開始当初の背景

(1) サイモン・クリッチリー氏は、興味深い著書『ヨーロッパ大陸の哲学』（筆者による翻訳、岩波書店、2004年、原書は2001年）で「良き人生を送るとはどのようなことか」「人生の意味とは何か」という実践的・倫理

的な問題が古代ギリシア以来の哲学の中心問題であり、かつ現代においても専門的哲学研究者の外部に居る一般の人々が哲学の中心主題に対して持つイメージであるにも拘わらず、今日主流となっている哲学がこうした問題に背を向け、多くの場合この問題との格闘を放棄していると述べていた。実際、「人

生の意味」という問題を専門の哲学研究の主題とすることは、日本では一種のデレクティビズムと見られがちだが（ただしこの問題と深く関与するニヒリズムを巡る問題はしばしば論じられている）、その一方で欧米の哲学研究では、この問題を主題とする著作は少なくない。

(2) しかしながら、この問題に対する従来のアプローチの多くには不十分な点があり、それは、人が「人生の意味」と言うときの「意味」概念が言語的意味作用とは明らかに異なるにも拘わらず、それが十分解明されておらず、それゆえ議論が学的厳密さを欠いている事であった。

(3) 研究代表者は、この独特な意味概念を時間論的視点から捉え直すことによって、この問題に新たな視角を開くことができると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「人生に意味はあるか」「その提案に意味はない」などと言われる場合の「意味」を「連関意味」と名付けてその本性を分析し、それを基礎とすることによって「人生の意味」という問題を学的に扱う基盤を与え、合わせてそこから見えてくるいくつかの問題、たとえば人が人生の意味に悩む典型的な場合に思われる四つのケースにおいて、何故人がそうした問いに導かれるのか、死によって人生の意味が無意味になるように見えるのはなぜか、個人の死という限界を超えて人生に意味をもたらす歴史観はどのような条件を満たさねばならないか、それを満たすような伝統的歴史観にはどのようなものがあるのか、人生の意味を見失うニヒリズムと自然科学の隆盛にはどんな関係があるのか、伝統的歴史観とニヒリズムの狭間で立ちすくむ現代人は、両者のジレンマからどのように脱出できるのか、といった諸問題にさしあたりの解答を与えることにあった。

3. 研究の方法

本研究が採った方法で特に留意すべきだと思われるのは、以下の二点であった。

(1) 連関意味の現象学的分析：連関意味の本性とはどのようなものであり、またそれは言語的意味とどのような関係にあるのか。この問題は、私たちが「人生の意味」の問題を考える際に避けては通れない問題であり、おそらくは導きの糸となってくれる問題である。「人生の意味とは何か」を問い、答えを探そうとするなら、そもそも、その場合「意味」という言葉で何が言われているのかを承知していなければならないからである。もちろん、こうした連関意味の本性に関する考察

は、これまでまったくなされなかったわけではないが、それが「人生の意味」の問題に何らかの示唆を与えうるほど十分に追跡されているようには思われない。それゆえ本研究は、「意味」という言葉のこうした使用法を日常生活の中で追跡し、さまざまな事例の考察を通じてその本性を見て取るという、非常に単純な作業を繰り返し行うことから始められた。これは、「人生の意味」というものに形而上学的、宗教的な高みから予め解答を与えるのではなく、私たちの身近な体験の中からその本性を見て取るという意味において、現象学的アプローチとも言える。

(2) 方法的ニヒリズム：これは、考察を進める途中で人生の意味を見出すある種の方法を見つけることがあったとしても、ニヒリズムが、さらにそれを否定する可能性があるならば、考察をその方向へと、すなわちよりニヒリスティックな方向へと進める、ということである。というのもそのように拡大、深化したニヒリズムをも最終的に回避できる方法があり、そこで何らかの形で人の生きる意味が確保されるとすれば、そこで本当にニヒリズムが克服される可能性があると考えられたからである。つまり本研究は、人生の意味と確かに呼べるものを見出すためにニヒリズム的考察を先に進めるのであって、それを見失うためにではない。これはデカルトに倣って方法的ニヒリズムと呼ばれた。デカルトが、いわゆる方法的懐疑によって少しでも偽りだと疑えるものを排除していったのは、本当に確実なものを見出すためであり、それは真理の存在を否定する懐疑主義とは異なっていた。それと同じように、方法的ニヒリズムは、人生の意味を最終的に否定する端的なニヒリズムとは異なっている。

4. 研究成果

本研究の成果は、著作『時と意味—人生の意味の哲学探究（仮題）』（四百字原稿用紙にして600枚弱）にまとめられ、現在出版を計画中である。以下にその目次と各章の要旨を記す。

(1) 目次（ただし細目は省略）

序文

第一章 序論—「人生の意味」と哲学

第一節 疑念の浮上する時

第二節 問いの強さ

第三節 ニヒリズムと社会

第四節 「人生の意味」と哲学

第五節 方法的ニヒリズムと仮のオプティミズム

第六節 手がかりとしての「意味」概念

第二章 「連関意味」論の開始—「人生の意味」へ向けて

第七節 日常的言語使用における「意味」

の三分類と連関意味

第八節 連関意味に関する従来の扱い

第九節 連関意味の基本的性格

第十節 「未来への影響」に関するいくつかの補足

第十一節 連関意味の区別—因果的連関意味と行為的連関意味

第十二節 三種の意味の総合可能性について

第三章 人生の意味

第十三節 問うことの有意味さ—問うという行為の特殊性

第十四節 「人が生きる意味」と「人生の意味」—行為的意味の一般化と全体化

第十五節 人生の意味の希求—問いの発生構造

第十六節 死

第四章 連関意味の相互主観的構成

第十七節 「人生の意味」を巡る主観主義と客観主義

第十八節 連関意味の相互主観的構成

第十九節 因果的決定論と行為的意味

第五章 歴史と連関意味

第二十節 歴史的意味付けの条件

第二十一節 条件を満たす伝統的歴史形態の検討

第二十二節 現代の歴史観とニヒリズム

第六章 ニヒリズムの淵源

第二十三節 ニヒリズムという語の多義性と明確な規定の必要性

第二十四節 ニヒリズム概念の歴史と連関意味

第二十五節 自然科学の隆盛とニヒリズムの拡大

第七章 ディレンマからの解放

第二十六節 ディレンマ

第二十七節 手懸りとしての自己目的的行為

第二十八節 自己目的的行為と連関意味

第二十九節 時間表象の根本的変更—〈線の呪縛〉からの解放

第三十節 問いの解消

あとがき

(2) 内容要旨

①連関意味の本性 (第二章)

本研究ではまず、「人生に意味はあるか」「その提案には意味がない」などと言われる場合の「意味」が「連関意味」と名付けられ、その本性が考察された。その際には、まず「意味」という語が日常的に使用される三つの場合が区別され、「連関意味」が他の二つ、言語的意味および本質、から分離された上で、この意味概念に関連すると思われる現象学的な意味概念や社会学的意味概念等が検討

され、いずれも不十分であることが示された。そうした検討に立って、連関意味の基本的な本性が考察され、それが「未来へ向けて引き起こす変化」として取り出された。また、一見してこの規定を外れるように見える事例についても補足的に検討された。さらに、当初は区別されていなかった二種類の連関意味、すなわち因果的連関意味（ある事象や行為が未来に因果的に及ぼす影響）と、行為的連関意味（因果的連関に関する認識に基づいて目的が設定され、その目的へ向かって行為が惹起されることによって因果系列が移轍されること）が区別された。この連関意味の区別は、これ以降の研究に大きな影響を及ぼすものであったことが、研究を継続してゆく上で判明した。また、こうした分析に基づいて、とりわけオースチン・サールの言語行為論を参照しながら、先に分類された三つの日常的「意味」概念の統合可能性が検討された。

②人生の意味の検討 (第三章)

連関意味の本性が日常的な言語使用の現場から分析された後、それが「人生の意味」の問題へと適用された。その際には日常的な行為と「人生」との差異が考慮され、いわば二段階の拡大が施された。すなわち、通常の個別的な行為を「生きる」という動詞へと一般化する段階と、人の誕生から死までを包含する「人生」へと全体化する段階である。また、こうした検討を通じて、人が人生の意味を問う問いが発生する典型と思われる四つのケースにおいて、何故この問いが発生するのかという問いの発生構造もまた分析された。さらに、この二種の拡大の双方において、連関意味を確保することは困難な問題にぶつかるが、とりわけそれは、人生が、死という終末を持つことによって、「未来へ向けて引き起こす変化」という連関意味が成立する基盤である、未来へと続く因果系列が途絶するという事態に起因していることが示された。しかし、このような死という限界は、連関意味をさしあたり個人にとってのものと考えることからくる限界であり、個人がその中で生きている社会の歴史という視点に立てば、連関意味の基礎をなす因果系列の連続は保たれる。つまり、自分の死を超えて因果的影響を死後に残したり、社会全体の目的のために一身を投げだすといった仕方では、個人の死を超えて人生の意味を確保することは連関意味論からしても可能である。しかし、そうすると、その個人の人生は本当に有意義であったのか否かの判断を誰がするのか、あるいは連関意味は何か客観性を持っているのかそれとも個人が有意義だと信じているだけの主観的なものに過ぎないのかという別の困難な問題に直面することになった。

③ 連関意味の相互主観的構成（第四章）

連関意味の主観性と客観性を巡る問題は、「人生の意味」に関してとりわけ英語圏の論者によって議論されており、本研究ではそうした議論を振り返りつつ、その不十分な点を指摘した。具体的には、主観主義を採っていたかつてのリチャード・テイラーとそれに対するジョン・ケクスの客観主義からの批判を軸として、双方の難点を指摘する。すなわち主観主義ではたとえ意味だと信じられていた何らかの行為が無意味だと思われるようになるといった変化を説明できないし、客観主義では何が有意味かを定める基準が一向に定まらない。本研究では連関意味は相互主観的に構成されるという立場を採るが、その変化は連関意味の基盤になっている因果系列の認識の変化によってもたらされること、別の言い方をすれば、因果系列の認識が変更されなければ有意味さを信じる主観性は破られないということ等が示された。

④ 歴史と連関意味（第五章）

前章において連関意味が相互主観的に確保される機序が確認されたのに続いて、社会の歴史の中で人生の意味が確保される条件が考察され、それが連関意味の二種に対応する形で示された。すなわち、まず歴史において人生の因果的意味が確保される条件が考察され、それに加えて行為的意味が確保される条件が考察された。その後、それらの条件が満足されると思われる伝統的な歴史観が検討された。まず、アウグスチヌス等を参照しつつ、キリスト教的な救済史観とその近代的な世俗形態と言われるものが検討され、それらの内では、イエスの再臨とその後の至福を歴史の目的とする歴史観によって、個々人の人生に行為的意味が確保される可能性が示された。また、他方の因果的意味が確保される歴史観としては、インド的な輪廻思想がこれに該当することが示された。しかし、これらは双方ともに現代の歴史観においても歴史の哲学においても顧慮されないものである。現代においては一つの目的を目指して進むという目的史観もまたその世俗化と言われる進歩史観も疑問視され、そもそも歴史を貫く連続性そのものが疑われていることが、ブルハルト、K・ポパー、A・C・ダントなどの所論を検討しつつ示された。だとすれば当然、歴史によって個人の人生の意味を確保しようとする方途は否定され、再びニヒリズムの危機に瀕することになる。

⑤ ニヒリズムの淵源（第六章）

ここではまず従来曖昧なままに用いられているニヒリズム概念の定義が再検討され、それが人生の意味の否定として改めて規定し直される。その上で、哲学的にはヤコービ

に始まると言われるニヒリズム概念の歴史がロシアニヒリズム、ニーチェへと改めて辿り直された。また、人生の意味が歴史的意味付与によって確保されるような形態が少なくとも二つあることが前章で確認されたが、そのキリスト教的な救済史観や、インド的輪廻思想が今日力を失っているように見え、つまりはニヒリズムに直面しているように見えるのには、自然科学的世界観の影響があるということを否定する人はあまりいないだろうと思われる。しかし、それはどのような影響だと言うべきなのか。自然科学の隆盛とニヒリズムの拡大とはそもそもどのような関係にあるのか。次に考察されたのはこの問題であった。自然科学とニヒリズムとの関係が語られる場合、自然科学の隆盛がニヒリズムの拡大を招来するという形で、前者の否定的側面が強調されることが多いが、両者の関係は一面的なものではなく、自然科学の力がニヒリズムの克服に寄与する場合もあることを忘れるべきではない。自然科学とニヒリズムとの関係がそのように両義的なものであることは、先になされた「生きる意味」と「人生の意味」という区別に対応させて語られた。そこでは終末論の歴史が振り替えられると同時に、デカルト、ボイル、ニュートン、コントらに即して近代の機械論哲学と目的論の関係が確認された。この章では終わりに、連関意味論の視点から信仰と自然科学の両立可能性が検討された。

⑥ ディレンマからの解放（第七章）

意味を「未来へ向けて引き起こす変化」と捉える連関意味論からして、未来が存在することの否定はニヒリズムを招来するものとなる。そうした否定はまず個人の死によって人生が限界づけられているように見えたことから生じたが、それは人類社会の歴史という視点から乗り越えられる可能性があった。しかし、人類社会そのものにも当然断絶の危機はある。その場合には人生の意味は確保されず、ニヒリズムに陥らざるをえない。これを本研究では「断絶の見解」と呼んだ。一方輪廻という古代インド思想や、未来における永遠の救済というキリスト教的救済史観は、人類社会のある種の永続性を保障するもので、これは「常在の見解」と呼ぶことができる。後者の立場を採れば人はニヒリズムから解放されるが、現代人の多くはそうした伝統的信仰のうちに身を投げ入れることに躊躇しており、ディレンマの内にある。こうしたディレンマを逃れる一つの方途は、いわゆるパスカル的な「賭け」であるが、本研究では「方法的ニヒリズム」によってこの方途は採らず、さらに別の方途がないかどうかを検討した。

その際には、M・シュリックの論文が手懸

りとして検討されたが、それは彼が人生の意味を未来の目的から考えることに疑義を呈し、むしろ現在のうちで充足する自己目的な「遊び」を称揚するからである。本研究はシュリックの所説が未だ十分ではないことを示しつつも、ここまでの研究では十分なされていなかった自己目的的行為を連関意味論から見直すことを通して、ディレンマ解消の道を探った。最終的には、断絶の見解、常在の見解の双方が前提としている線的な時間表象の根本的変更によって、連関意味を巡るディレンマが解消されることが提示された。

その際に議論の中心に置かれたのはベルクソンの純粹持続論であり、純粹持続に立てば連関意味の問題がどのように見直されるかが考察された。すなわち、時間の本性が本来、線的なものでないのだとすれば、連関意味を巡る問題は、本来存在しないのである。それが存在するよう見えるのは、私たちが時間を空間化し、人生や宇宙の経過を線として表象するからに他ならない。こうした「問いの解消」という解決法に対する疑念も当然生じようが、そのいくつかについても検討されて本研究はいちおうの決着を見た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. 佐藤透、人はどの程度「歴史物語」を必要とするか、ヨーロッパ研究、査読無、第8号、2010、73～98

[図書] (計1件)

1. 佐藤透、共感と感応—人間学の新たな地平、東北大学出版会、2011、3～33

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 透 (SATO TORU)

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：60222014

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：